

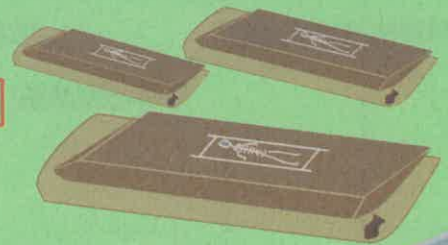
天理市埋蔵文化財センターだより

Vol.8

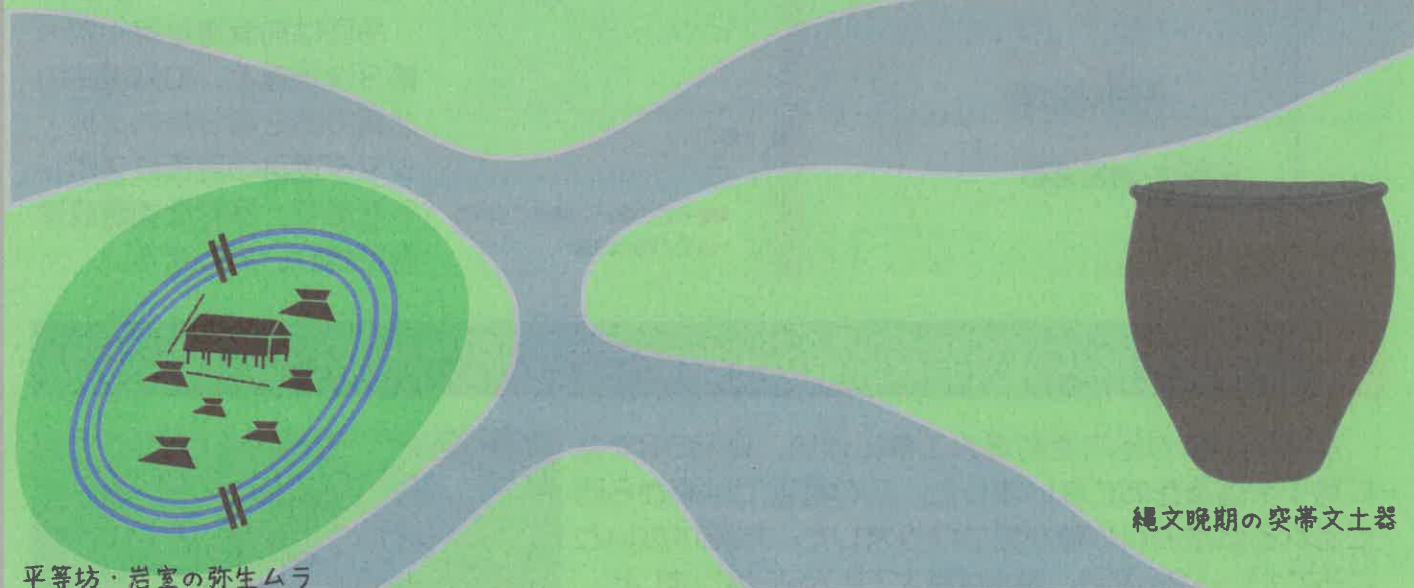
特集 『発掘の現場から
-地下に眠る天理の昔々-』

前栽遺跡とその遺物

前栽遺跡 九ノ坪・シマダ遺跡



方形周溝墓



平等坊・岩室の弥生ムラ

縄文晩期の突帯文土器

◎夏の文化財展

『発掘の現場から
-地下に眠る天理の昔々-』
前栽遺跡とその遺物
2009年8月12日(水)
～30日(日)

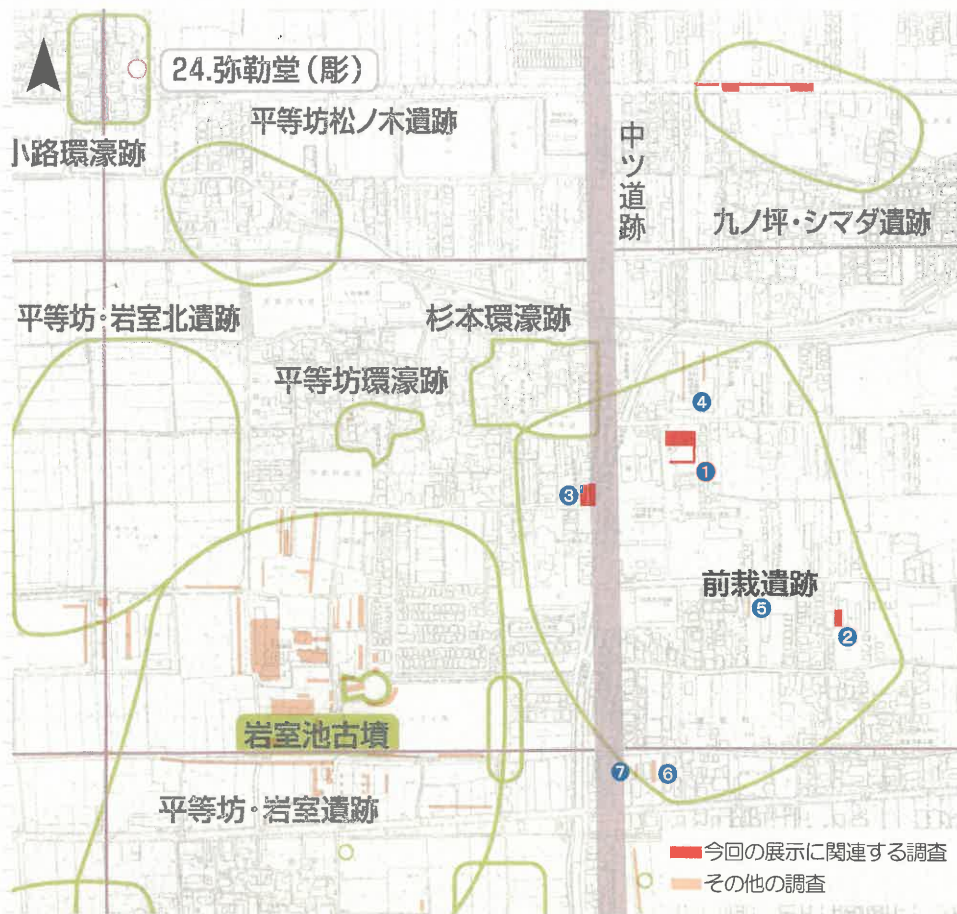
天理市文化センター
1階展示ホールにて
※月曜・祝日は休館日

◎文化財講演会と展示解説
8月15日(土)午後2時から
1階展示ホールにて

天理市教育委員会文化財課では、これまでに市内の遺跡における多くの発掘調査を実施しています。そのなかには開発に伴う調査に限らず、遺跡の範囲確認や史跡整備に伴う学術調査も実施していますが、これらの調査成果については市民の皆さんの目に触れる機会が少なかったかと思えます。

そのため、平成18年度より夏と冬の年2回の文化財展示をおこない、市内の埋蔵文化財について理解を深めていただけるように努めています。

今回の「センターだより」では、市内中央部に所在する前栽遺跡を紹介することにします。



前栽遺跡は布留川流域に立地する遺跡で、遺跡内を古代の幹線道路である中ツ道が通っています。また前栽遺跡のすぐ西側には、弥生時代の拠点集落である平等坊・岩室遺跡が広がっています。

前栽遺跡では、昭和58年度から現在までに7次にわたって発掘調査がおこなわれ、縄文時代晩期から中世にいたるまで、貴重な資料が多数得られています。

今回は前栽遺跡第1次～第3次調査と、前栽遺跡の北側でおこなった九ノ坪・シマダ遺跡の調査にスポットをあて、多彩な調査成果をご紹介します。

とったいもんとき じょうもんじだいばんき
突帯文土器 — 縄文時代晩期の土器 —

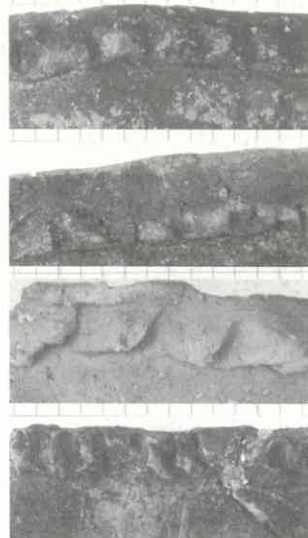
前栽遺跡第1次調査

前栽小学校の屋内運動場の工事に伴い、昭和58年度に第1次調査をおこないました。この調査では東から西に流れる自然の川の跡が見つかりました。川幅は広いところで11～12mあり、深さは最大で2.7mに達しました。この川の岸边付近から縄文時代晩期（約2500年前）の「突帯文土器」と呼ばれる土器の破片が大量に出土しました。

航空写真（西から）



復元された突帯文土器



さまざまな口縁部突帯

突帯文土器とは、縄文時代晩期～弥生時代早期にかけて、九州から東海地方東部までの広い範囲に成立した土器の名称です。口縁部や肩部に突帯と呼ばれる粘土の帯を貼り付けるのが特徴で、稲作が始められた頃に使われていた土器と考えられています。縄文時代から弥生時代への移り変わりを示す資料です。

前栽遺跡で出土した突帯文土器には深鉢・壺、浅鉢の3種があります。深鉢には表面が黒く煤け内面に炭化物が付着したものがああり、煮炊きに用いられていたことがうかがわれます。

前栽公民館の建設工事に伴い、平成6年度に第3次調査をおこないました。この調査では「^{ほうけいしゅうこうぼ}方形周溝墓」と呼ばれる弥生時代中期の墓が5基発見されました。方形周溝墓は弥生時代の近畿地方では一般的な墓のあり方です。発見された墓の盛土は後世に削られたため残っておらず、その周囲の溝のみ確認するにとどまりましたが、溝内からは墓に^{きょうげん}供献された土器が出土しました。



1号・2号方形周溝墓



供献された土器

この第3次調査地の南西には弥生時代の拠点集落である平等坊・岩室遺跡が広がっています。この平等坊・岩室遺跡の^{かんこうたい}環濠帯の北側を流れる川跡の北岸付近で、やはり方形周溝墓と思われる遺構が最近発見されました(平等坊・岩室遺跡第28次調査)。前栽遺跡第3次調査の成果とあわせて考えると、集落の北側一帯には多数の墓が築かれていた可能性があると言えそうです。

古墳時代の遺構と遺物

都市計画道路建設に伴い、昭和57年度に発掘調査をおこないました(九ノ坪・シマダ遺跡)。調査では古墳時代前期～中期前半の川跡や土坑などが見つかりました。川跡からは表面に煤のついた土器が多数出土しており、周辺に同時期の集落が営まれていたようです。

この九ノ坪・シマダ遺跡からは、勾玉、管玉の未完成品、玉の材料である^{へきぎよく}碧玉、^{かつせき}滑石、グリーンタフも出土しています。こうした遺物からは近隣で玉作がおこなわれたことが推定されますが、工房跡は見つかっていません。

さらに別の遺構からは銅鏃も出土しており、集落の多彩な性格がうかがわれます。



調査風景



土坑内の出土状況



出土した銅鏃・玉類



子持勾玉

前栽遺跡と中ツ道 一方形周溝墓



石組の井戸



出土した木製匙

飛鳥時代、大和盆地を南北に貫く幹線道路として上ツ道、中ツ道、下ツ道の三道が造られました。このうち中ツ道は前栽遺跡の西寄りを通り、その後も^{たぢな}橘街道と名前を変えて現代まで受け継がれています。

昭和59年度におこなった第2次調査では、奈良時代から中世にかけての井戸跡が見つかりました。井戸は石組のもの、素掘のもの、板枠を用いたもの、曲物を用いたものなどバラエティに富む点が興味深いところです。平安時代初頭の井戸からは、木製の匙や櫛、祭祀用の竹製品(齋串)など特殊な遺物(いぐし)が出土しました。特に、木製匙は新羅から輸入された金属製の匙を模倣して作られた可能性があります。前栽遺跡が中ツ道沿いの交通の要衝として栄えたことをうかがわせる資料です。

出土品紹介

銅鏃 どうぞく

昭和57年度におこなった九ノ坪・シマダ遺跡の発掘調査では、調査区内で見つかった方形の土坑から銅鏃(青銅製の矢尻)1点が出土しました。銅鏃は「わだくろりやないぼしき腸扶柳葉式」と呼ばれる形状で、長さは4.7cm、厚さは0.4cmあります。形状からみて古墳時代前期のものと考えられます。



銅鏃出土状況

銅鏃は弥生時代後期～古墳時代前期を中心に製作されたもので、古墳の副葬品として出土する例が多く知られています。天理市内でも上殿古墳(和爾町)や東大寺山古墳(櫛本町)で銅鏃が多数出土しています。



■九ノ坪・シマダ遺跡出土銅鏃

出動！ 発掘現場レポート！！

平成20年度下半期の調査

天理市教育委員会は平成20(2008)年度下半期に発掘調査を3件実施しました。ここではその成果をいち早くお知らせいたします。

■袋塚古墳第3次

別所町内の市道建設工事に伴い発掘調査を実施しました。調査では袋塚古墳の後円部北西側の周濠を確認することができました。昭和60・61年度におこなった第1次・第2次調査の成果とあわせて、袋塚古墳の形状を推定する上での重要な手がかりが得られました。

■条里遺跡

田部町で実施されている土地区画整理事業に伴い発掘調査をおこないました。調査では川の堆積層を確認し、古墳時代から平安時代にかけての遺物が出土しました。

■内山永久寺跡

杣之内町の内山永久寺跡でポケットパーク建設が計画されたため、伽藍中心部における初めての発掘調査をおこないました。永久寺に伴う造成土を確認するとともに、永久寺造営に近い時期の瓦などの遺物が多数出土しました。



■平成20年度下半期の調査遺跡



■内山永久寺跡
航空写真(西から)



■内山永久寺跡
出土した軒丸瓦・軒平瓦

平成20年度の調査成果は
今年冬の文化財展で
展示するよ！



※「天理市埋蔵文化財センターだより」Vol.9 は、平成21年冬発行予定です。
お楽しみに！！

発行◆天理市教育委員会 文化財課
天理市埋蔵文化財センター
〒632-0017 奈良県天理市田部町320
Tel・Fax 0743-65-5720
印刷◆富光コピー(株)